

水稲晩期栽培における移植期について

江 副 浩*

Ezoe, H. On the Date of Transplanting in Late Cultivation of Rice Plant

緒言 従来夏作蔬菜や潤草の跡地に仮植苗の利用によつて晩稲の晩植栽培が実施せられていたが、仮植及び移植時の多労と母田における減収は予想外に大であった。また本県における水害発生は6月下旬から7月上旬が最も多く、この時期の水害によつて苗不足の問題になやまされていた。しかるに昭和28年から西南暖地の各県に実施せられてきた、水稲の晩期栽培は従来の晩稲晩植に比べて労力は少なく、収量の安定性も高まつてきたので、その実用性はかなり大きいものと考えられる。当場においてはその移植期について試験を実施したので、成績の概要を報告する。

試験方法 1. 供試品種 藤坂5号、農林17号、綾錦、ナカセンゴク。

2. 試験区別 7月5日播～7月27日植、7月10日播～7月30日植、7月15日播～8月4日植、7月20日播～8月9日植。

3. 耕種概要 當場標準。

試験成績 1. 生育状況

(イ) 移植における苗の生育 播種は折衷苗代に行つたが、7月18～19日と7月26日の豪雨によつて冠浸水の被害をうけた。苗令は4～5未満で、草丈も移植に支障がない程度に伸長していたが、生体重は早期及び普通栽培に比べて少なかつた。

(ロ) 移植後の莖数の変化 有効分蘗決定期及び最高分蘗期は、各品種共同一の傾向が見られた。即ち有効分蘗期は7月27日植では移植後15～16日、7月30日植及び8月4日植は移植後14日位、8月9日植は移植後15日位で、また最高分蘗期は

7月27日植及び7月30日植、8月4日植は移植後24日、8月9日植は移植後21日位ではなかつたかと推察せられた。

(ハ) 幼穂形成期 幼穂形成期は出穂期が9月10日前後の場合には出穂前16～17日頃、出穂期が9月20日頃の場合には、出穂期前20日頃、出穂期が9月25日前後となれば、出穂前22日頃ではなかつたかと推定せられた。

(ニ) 出穂期及び成熟期 8月4日植迄はナカセンゴクを除き、出穂期は安全な限界ではないかと考えられる。次に8月9日植になると、農林17号は綾錦より出穂は遅れた。

2. 収量及び品質 玄米の1升重及び千粒重は7月30日植迄は各品種共大差なかつたが、8月4日植では藤坂5号を除き多少減少の傾向が見られ、8月9日植では最も少なかつた。次に玄米反当収量は8月4日植迄はナカセンゴクを除き減収が少ないが、8月9日植では各品種共著しく減収を示した。なお、品質は藤坂5号及び農林17号は8月4日植迄、綾錦は7月30日植迄、ナカセンゴクは7月25日植は商品的価値が認められたが、その他はかなり品質が低下した。

3. 考察 晩期栽培においては収量の比較と共に品質についても充分検討せねばならないと考えられるが、7月27日植ではナカセンゴクが最も多収を示し、次が綾錦で品質も普通程度であるので、両品種程度の成熟期をもつた多収性の品種であればよいものと考えられるが、それ以上移植期が遅れるに従つて、成熟期の早い品種が収量及び品質の低下が少ないようである。

*佐賀縣農業試験場